

発行：大阪YWCA平和・環境部委員会
パレスチナグループ
☆「りさーら」とはアラビア語で
「手紙」「伝言」という意味です。



〒530-0026 大阪市北区神山町 11-12
06-6361-0838 fax06-6361-2997
e-mail info@osaka.ywca.or.jp
http://osaka.ywca.or.jp

難民キャンプの子どもたちと共に…KEEP HOPE ALIVE

ラマツラYWCA総幹事 ルフィーナ・ラフィディ

ラマツラに近いジャラズーン難民キャンプは、1948年の設立当時、人口3,500人でした。当時と変わらぬ2平方キロメートルの敷地に、現在は1万6千人が暮らしています。UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）によって運営される難民キャンプの子どもたちの学校は、キャンプの外に建てるしかありませんでした。学校はキャンプに隣接した場所にあるにもかかわらず、そこがイスラエルの入植地ベテルの敷地内にあるため、問題の種となっています。難民キャンプの住民と入植者とはただならぬ緊張関係にあります。難民キャンプに暮らす子どもたちにとって、生活は極めて過酷なものです。失業率は60%に上り、障がいを持つ子どもの割合は高く、それをサポートする社会資源は限られています。日常的な給水制限があり、貧困と過密な住環境の中にあります。



パレスチナYWCAは、難民とともに働く女性によるNGOの草分けの一つであり、UNRWAの事業開始に先立ち、過去70年間、関わり続けてきました。1956年当時、女性たちと協働することは大変困難でした。そのため、YWCAの会員は、女性たちをエンパワーするため、子どものための活動を始めました。それが現在の幼稚園につながっており、難民キャンプの支援となっています。



ラマツラYWCAの総幹事として、またジャラズーン難民キャンプ内のコミュニティセンターの責任者として、この幼稚園が、子どものための安全な居場所となるよう、これまでみんなで奮闘してきました。教室を改装し、外の壁には奥行きのある絵を描きました。難民キャンプの外にさえ出たことのない子どもたちに、よりよい将来を描くことができるよう願って描いたものです。

← 難民キャンプの壁に描かれた風景

この幼稚園は、質の高い園として評価されています。音楽、美術、スポーツを教室づくりに取り入れた統合的な教育を行っています。一方で、イスラエルによる暴力、それに伴うトラウマの増加により、子どもの心のケアが必要になっています。保護者もまた、不安定な政治状況によってメンタルヘルスがむしばまれており、心理的な充足を少しでも得るために、同様に支援が必要です。難民のコミュニティとともに働く女性団体として、YWCAの使命は、希望を失わないために働くこと、とくに子どもが希望を持ちづけられるように働くこと、私たちのスローガン“KEEP HOPE ALIVE”そのものです。楽観主義とは将来より良いことが待っていると信じること。「グラスの半分は空っぽ」ではなく「グラスの半分はいっぱい」と考える精神、希望とはそのような楽観主義であり、ゴールを目指して進むことであり、占領を終わらせ、平和と正義が実現されるために一步を踏み出すことだと考えています。



昨年5月に訪れた難民キャンプの幼稚園の子どもたち。絵本に声を上げて喜び、指さして楽しむ様子は日本の子どもと変わらない。この時お会いしたルフィーナさんをお願いして今回は原稿を寄せていただきました。（大阪YWCA会員 宮崎祐）

2020年2月パレスチナを訪れて

2018年パレスチナYWCA国際ユース会議・オリーブ収穫ツアー参加に続いて、2度目のパレスチナ訪問。今回はパレスチナ北部の町、ナブルスを中心に滞在した。

ナブルスは、クナーフェというデザートやオリーブ石鹸でも有名だ。第2次インティファダ(2000年8月)では街が封鎖され、多くの人々が戦闘の生々しい記憶を今も共有しているが、山に囲まれた美しい街は活気にあふれていた。

ナブルスから車で15分程のセバステアという村には、古代文明の遺跡がある。乗合タクシーを降りた小さな村の中心では子どもたちが遊んでいて賑やかだったが、古い家々は決して裕福とは言えない生活を表していた。

細い道を歩き、丘の頂上の開かれた一帯に遺跡はある。2010年頃にはその横の広い空間で毎晩のようにバーベキュー等をして近所の人が集まっていたそうだが、今は駐車場になり、イスラエルの大型観光バスが駐車していた。村民たちの姿はなく、団体客が数十名いた。

遺跡周辺を歩いていると、近くに住んでいると思われる男性が声をかけてきた。ペットボトルに入ったオリーブオイルをどうしても買って欲しいと言う。生活のために物を売り懇願する地元の人と観光客、ささやかな村の暮らしとその村を通らずに駐車場に入る大型バス。そのコントラストが強く印象に残った。人々が古くから大切にしてきた場所を奪い、勝手に線を引き、自分たちのものにしていくイスラエル政府のやり方を間近に感じた。



おもてなし料理「マクルーベ」

別の日に、クスラという村にも行った。突然の訪問だったのにも関わらず、村に住むある家族が案内してくださり、おいしい昼食も出してくれた。

クスラは複数の小さな入植地に囲まれていて、Zone B(パレスチナ自治区)とZone C(イスラエル軍管理下)の境界線が村を縦断し、村の東側にあるモスクを貫通している。「この線を引いた人たちは、村人のことなんかにも考えていない」。一部の入植者はオリーブの木を抜き、モスクに火をつける等の破壊行為を行ってきた。ここ2年ほどは以前よりましになっているというが、それでも嫌がらせは続いているという。

今回の旅では、パレスチナに住む人々が経験している抑圧や分断を日常会話の文脈で何度も耳にした。最近も西岸地区の併合計画やエルサレムでのパレスチナ人射殺等、ひどいニュースが続いている。それでも、オリーブは実り、人々はおいしい食卓を囲む。またパレスチナに行きたい。

(熊本YWCA会員 斎藤未緒)

初の試み！！ 日本各地YWCAとのオンライン「パレスチナ女子会」報告

日本中がコロナ禍の中、日本YWCAがZoomを利用した「Webセーフスペース」なる新たな集いの場を提案してくれたことを受け、6/27(日)19時からオンライン「パレスチナ女子会」を開催しました。熊本、神戸、京都、横浜、東京、大阪の各地域YWCAから計15名が参加しました。

大半が初対面同士とは思えない和やかな雰囲気、2時間があっという間に過ぎました。全員の自己紹介の後、パレスチナ訪問経験者の4人が、それぞれの訪問記を、時に写真を画面共有しながら発表しました。訪問した年は2013年から最近では今年2月まででしたが、パレスチナが置かれた状況は年々悪化している様でした。そんな状況下でも現地のパレスチナ人がなんとか工夫して明るく生きていこうとする姿勢が印象的でした。パレスチナに関するイベントに参加するのが初めてという人も、パレスチナツアーに参加したくなった等、連帯の輪がまた少し広がったのでした。

(大阪YWCA会員 七条聡美)

パレスチナグループは仲間募集中

パレスチナの声をも身近に感じて、私たちにできることは何かを足元から考えたく、緩やかに声をかけあっては集まっています。年に1回程度この「りさーら」を編集しています。興味のある方、ぜひお気軽にご連絡下さい。

大阪YWCA平和・環境部委員会(担当:原田)

TEL06-6361-0838 fax06-6361-2997

e-mail info@osaka.ywca.or.jp

Keep Hope Alive.



クスラのオリーブの木 撮影：斎藤未緒



セバステアの壁に描かれた絵 女性が鍵を握りしめた手を兵士に向かって掲げている。